

マルコによる福音書 10 章 23 節～34 節

2017 年 5 月 25 日

古本 靖久

1、聖歌 483 番 「神の国と神の義を まず求めよう」

2、お祈り

3、聖書輪読 （新約聖書 82 ページ）

4、テキストの位置

前回の場面で、イエス様は金持ちの男に対して「行って持っている物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる」と言われました。

その言葉を聞いて、たくさんの財産を持っていた彼は気を落とし、悲しみながら立ち去ったとあります。

ユダヤへ	10:1-12	律法のとらえ方
	10:13-16	子どもを来させる
	10:17-22	金持ちの男
	10:23-31	神の国に入るには
	10:32-34	第三回受難予告
	10:35-45	仕える者として
	10:46-52	目が見える

しかしこの物語は、決して裕福な人物に対してだけに語られたものではありません。今日の場面では話の対象は弟子たちに向けられます。そしてイエス様は三度目になる、ご自分の受難予告をされるのです。

5、節ごとに

◆神の国に入るには

10:23 （そして）イエスは弟子たち（周り）を見回して（自分の弟子たちに）言われた。
「財産のある（を持つ）者が神の国に入るのは、なんと難しいことか。」

この時代、裕福な人は神さまから富や権力を与えられていると考えられていました。また富んでいる人は、会堂や神殿に対して資金を提供するなどして、自分たちと神さまとの特別な関係を誇示していました。彼らは、神の国に最も近いと考えられていたのです。

10:24 (だが) 弟子たちは(彼の)この言葉を聞いて驚いた(に驚愕した)。イエスは更に言葉を続けられた(こたえて言った)。「子たちよ、神の国に入るのは、なんと難しいことか。

弟子たちはこのイエス様の言葉に驚愕します。当時のユダヤの考え方からすると、当然のように思えます。しかしイエス様は、金持ちではなく、貧しい人と共に歩んでいました。弟子たちはその姿を嫌というほど見てきたはずで

逆に財産を持つ人たちは貧しい人や弱い人たちをないがしろにし、罪人だと決めつけていました。弟子たちにもまだ、そのような考えがあったのかもしれませんが。イエス様はその弟子たちに「子たちよ」と語られます。いつまでたっても無理解な弟子たちに、あきらめることなく愛情をもって語られるイエス様の姿が感じられます。

ちなみに多くの写本は、イエス様の言葉を「子たちよ、富に頼るものが神の国に入るのは」と書き直しています。イエス様の批判の矛先を金持ちだけに向けたかったのかもしれませんが、実際はどうなのでしょう。

10:25 金持ちが神の国に入るよりも(は)、らくだが針の穴を通る方がまだ(もっと)易しい。」

らくだは乾燥地帯には欠かせない動物で、体高は 180-215cm もあるそうです。それに対して針の穴はわずか数 mm。このイエス様が語ったたとえを、何とかして解釈しようという試みもありました。

たとえばらくだというギリシア語は、舟の網という言葉に似ているので、網が針の穴を通る方が、とするものや、エルサレムには針の穴という名前の小さな門があり、そこをらくだはかがんで入っていったのだとする説もありました。しかしイエス様の言いたかったことは、こういうことです。「金持ちであるということ、神の国に入れることなどありえない」。

10:26 弟子たち(彼ら)はますます驚いて(啞然として)、「それでは、だれが救われるのだろうか」と互いに言った。

この箇所を読んだときに、「じゃあ金持ちではなければいいのだ」と思うことはないでしょうか。しかし当時、金持ちは神の国に一番近い存在だと考えられていました。だから彼らは、イエス様がこう言ったのだと解釈しました。「神の国に一番近い金持ちですら、神の国に入ることなどできない」と。

10:27 イエスは彼らを見つめて言われた。「人間に（の元では）できることではないが、神に（の元で）はできる。神（の元で）は何でもできるからだ。」

イエス様は弟子たちを見つめます。このイエス様の眼差しを想像してみましょう。怒っていますか。嘆いていますか。それとも笑っていますか。わたしにはイエス様が、驚く弟子たちの姿を楽しんでいるようにも思えます。

この文は単に「人間には、神には」というものではなくて、直訳すると「人間のところでは、神のところでは」となっています。とても訳しづらいところなのですが、神さまの名のもとにとか、神さまに頼って、神さまの恵みの元というニュアンスでしょうか。

人間の力に頼っては不可能なことも、神さまは可能にしてくれます。罪に汚れ、神さまの前に立つことなどできないわたしたちをも、神さまは憐れんで下さり、神の国へと導かれるのです。

10:28 ペトロがイエス（彼）に、「このとおりに（ご覧なさい）、わたしたちは（まさに）何もかも（一切を）捨ててあなたに従って参りました」と言いだした。

ここでペトロが口を開きます。黙っておけばいいのにも思いますが、彼がイエス様に言ってくれるおかげで、わたしたちはさらに多くのことを学ぶことができます。

日本語に訳すと分かりづらいのですが、ペトロの「わたしたち」という語は強調されています。「金持ちはどうか知らないし、他の人も中途半端かもしれないけれども、わたしたちは」、と言っているのです。しかしこのペトロの言葉には大きな誤りがありました。

10:29 イエスは言われた。「はっきり（アーメン、わたしはあなたがたに）言っておく（う）。わたしのため（故に、）また福音のため（故）に、家、兄弟（たち）、姉妹（たち）、母、父、子供（たち）、畑を捨てた者はだれでも（で）、

ペトロの誤り、それは「捨てて」、「従った」という順番です。無理やり大切なものを手放して、イエス様について行くことが本当の信徒ではありません。イエス様の故に、福音の故に、豊かな恵みを受けて、今まで大切に思っていたものがどうでもよくなってしまうのです。

これがないと生きていけないと思っていたものに、しがみつ়く必要を感じなくなるのです。すべてを処分しなさいということではありません。神さまの愛を感じたときに、すべての優先順位が変わり、価値観の逆転が起こるのです。

10:30 今この世で（時に）、迫害も受けるが（の中に）、家（々）、兄弟（たち）、姉妹（たち）、母（たち）、子供（たち）、畑も百倍受け（ることなく）、後の（来たるべき）世では永遠の命を受ける（ことのない者はいないだろう）。

原文は二重否定でしたので、そのまま訳してみました。29 節では単数だった「家」、「母」が、30 節では複数になっています。また 29 節には登場していた父は、30 節では登場しません。

父という語は、ユダヤ教の「父なる神は唯一」という信仰に基づいて省かれたのだと思われます。そして「家」と「母」が複数形になったのは、この新しく受けるものが、今でいう「教会」を現しているからではないでしょうか。この世で受ける報いの中に、新しい家族に受け入れられるという恵みがあるのです。苦難も同時にあるでしょう。しかしこの喜びを感じて、歩んでいきたいものです。

10:31 しかし、先にいる多くの（最初の）者が（最）後になり、（最）後にいる多くの者が先（最初の者）になる（だろう）。」

すべての価値観は逆転されます。人の目には常識だったことも、神さまの視点によれば非常識なのです。そして人間には不可能なことも、神さまからすると可能なのです。

そして価値観が逆転する最も大きな出来事は、イエス様の十字架です。その布石がここで打たれているのです。

<ここまでの箇所から>

ご利益宗教という言葉があります。一生懸命祈願をし、お賽銭を入れ、絵馬に願い事を書くことで、求めていることが適う、簡単にいうとそういうことなのかもしれません。ではキリスト教は、ご利益宗教なのでしょう。

答えは「ノー」です。イエス様はなぜ来られたのか。それは、人間は自分の力だけでは神さまに背き、神さまを悲しませる存在だからです。いくら努力しても、ささげ物をして、欲望を断っても、神さまの前に正しくなることなどできません。

しかし神さまはそのようなわたしたちに、圧倒的な愛を注いでくださいました。そして再び神さまの子どもとして迎え入れて下さいます。人間には不可能なことを、可能にしてくださいなのです。「金持ちだから」、「良いおこないをしたから」、そのような人間的な視点は、神さまにはまったく関係ないのです。

◆第三回受難予告

10:32 (さて)＝行(彼ら)がエルサレムへ上って行(る)途中(上)、イエスは(彼らの)先頭に立って進んで(導いて)行かれた。それを見て、(そして)弟子たち(彼ら)は驚き、従う者たちは恐れた。(そして)イエス(彼)は再び十二人を呼び寄せて、自分の身に起ころうとしていることを(彼らに)話し(語り)始められた。

ここから、三度目の受難予告がはじまります。今回の受難予告も、ペトロの先ほどの「わたしたちは」という言葉を受けてなされます。イエス様はここでも、無理解な弟子たちを導こうとされます。逆にいうと、無理解な弟子たちでさえも、イエス様の十字架と復活によって変えられるのです。



マルコ福音書ではここではじめて、イエス様の最終目的地がエルサレムであることを明らかにします。この町は、イエス様に対して敵対心をもっていた場所です。エルサレムという地名を出すことで、イエス様の死は不可避であることを象徴しています。

しかしそれでも、イエス様は先頭に立ちます。苦難が待っているはずなのに、その目はエルサレムを見据え、後から従うものを導きます。その姿に弟子たちは驚き、そして周りの人たちは恐れるのです。

10:33 「(見よ)今、わたしたちはエルサレムへ上って行く。(そして)人の子は祭司長たちや(、)律法学者たちに引き渡される。彼らは(彼を)死刑を宣告して(に断罪して)異邦人に引き渡す(だろう)。

最初の二つの受難予告と比べると、具体的で細かい記述が目立ちます。わたしたちが礼拝で使徒信経やニケヤ信経を唱えるように、福音書が書かれた時代にもイエス様の出来事を思い返すために、唱えられていたのかもしれませんが。

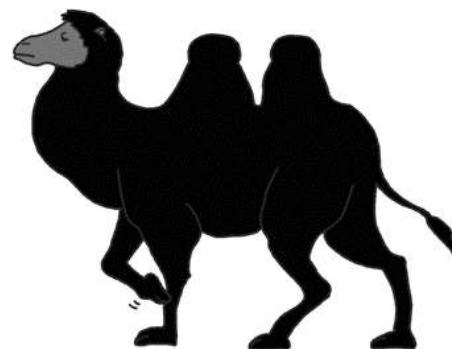
10:34 (そして)異邦人(彼ら)は人の子(彼)を侮辱し(嘲笑い)、唾を(吐き)かけ、鞭打ったうえで(ち、そして)殺す(だろう)。そして、人の子(彼)は三日の後に復活する(だろう)。」

「侮辱する」という動詞ですが、この語は「子ども」という単語に接頭語をつけて、さらに動詞の語尾をつけたものです。簡単にいうと、「子どもに対しておこなうこと」というニュアンスが含まれる言葉です。

つまり、相手を子ども扱いしたり、からかったりという感じです。イエス様の受難の場面を読み返してみてください。子どものように嘲笑われ、からかわれるイエス様の姿が、そこに見えてくるかもしれません。

<今日の箇所から>

神さまと人間との関係を思い浮かべるときに、お母さんと赤ちゃんの姿を想像することがあります。お母さんは赤ちゃんが大好きです。いつも大切に見守っています。ミルクをあげ、泣いていたら抱っこしてあやし、寝付くまで横にいてトントンしてあげます。



では赤ちゃんは、お母さんに対して何かをしてあげたりするのでしょうか。キャッキョッと笑ってお母さんを笑顔にさせるかもしれません。できなかったことが一つできるようになってお母さんを喜ばせるかもしれません。でもたとえそんなことができなかったとしても、お母さんは赤ちゃんのことが大好きなのです。

神さまはわたしたちがとても素晴らしい存在だから、愛してくださるのでしょうか。特別な何かができるから、手を差し伸べてくださったのでしょうか。決してそのようなことはありません。わたしたちはちっぽけな存在です。そして幾度となく神さまを裏切り、悲しませてきました。

しかし神さまは、そんなわたしたち一人ひとりを愛してくださいます。理由はありません。ただ一方的に、大きな愛を与えてくださるのです。

その恵みを受けて、わたしたちの目は神さまに向かうのです。そしてまだ恵みを知らずに苦しんでいる人の元にも向けられるのです。自分では抱えきれないほどの愛を神さまから頂いたから、その一部を隣の人にお裾分け、それでいいのです。

イエス様は三度もご自分の受難を予告されました。どうしてもわかって欲しかったのだと思います。なぜイエス様はわたしたちの間に来られたのかということ。そして復活するという希望を与られます。「絶対にあなたがたを一人ぼっちにはさせない」、その強い思いを、わたしたちは受け取っていきたいと思います。

今回の学びはこれで終わります。次回は6月22日(木)10時30分からです。「仕える者として」(マルコ10:35~45)について学んでいきます。